

浮舟

泉鏡花作

—

「浪花江の片葉の蘆の結ばれかゝり——よい
やさ。」と蹠踉として、

「これわいな。いや、どっこいしょ。」

脱いで提げたる道中笠、一寸左手に持換へて、紺
の風呂敷、桐油包、振分けの荷を兩方、蝙蝠の憑物
めかいて、振落しさうに掛けた肩を、自棄に前に突
いて最一つ蹠踉ける。

「解けてほぐれて逢ふ事もか。何を言やがる。
此方あ可い加減に溶けさうだ。」

まつにかひあるヤンレ夏の雨、かい
おいでなすつたかい。」

さつと沈めた浪の音。磯馴松は一樹、一本、薄い
枝に、濃い梢に、一ツづゝ、翠、淡紅色、繪のやう
な、旅館、別荘の窓灯を掛連ね、松露が戀に身を焦

す、紅提灯らほらと、家と家との間を透く、白砂に影を落して、日暮の打水のまだ乾かぬ茶屋の葎篋も青薄、婦の姿もほのめいて、穂に出て招く風情あり。此處は二見の浦づたひ。

眞夏の夜の暗闇である。此の四五日、引續く暑さと云ふは、日中は稍子を焼くが如く、嚇と晴れて照着ける、が、夕風とともに曇よりと、水も空も疲れたやうに、ぐつたりと雲がだらけて、煤色の飴の如く粘々と搔曇つて、日が暮れると墨を流し、海の波は漆をぬらす。此で居て今夜も降るまい。癖に成つて、一雫の風を誘ふ潮の香もないのであつた。

男は草鞋穿、脚絆の兩脚、しゃんとして、恰も一本の杭の如く、松を仰いで、立停つて、
眦を返して波を視た。

「あゝ、唄ぢやねえが、一雨欲しいぜ」

俄然として額を叩いて、

「慌てまい、六ちゃん、いや、ちやんと云ふ柄ぢやねえ。六公、六でなし、六印、月六齋で居やあが

ら。はゝはゝ。」

肩を刻んで苦笑ひして、又ふら／＼と砂を踏み、

「野宿に雨は禁物でえ。」

其の時躓く。

「これわいな！ 慌てまいとは此の事だ。はあ、松の根ツ子か。此の、何でもせい。」

岸邊の茶屋の、それならぬ、渚の松の舫船。――

六藏は投遣りに振った笠を手許に引いて、屈腰に前を透かすと、つい目の前に船首が見える。

船は、櫂もなく艫もなしに、濱松の幹に繋いで、一棟、三階立は淡路屋と云ふ宏壮な大旅館、一一軒は當國松坂の富豪、池川の別荘、清酒なる二階造、二見の浦の海に面した裏木戸の兩の間、表通りへ抜路の濱口に、波打際に引上げてあつた。

女夫巖へ行くものゝ、通りがかりの街道から、此の模様を視めたら、其も名所の數には洩れまい。舷

に鯨は飛ばないでも、舳に蒼い潮の鱗。船は波に、
海に浮べたかと思はれる。が藍を流した
池のやうな浦の波は、風の時も、渚に近い此の船底
を洗ひはせぬ。戯にもづなの舫を解いて、木馬の
かはりにぐら／＼と動かしても、縦横に揺れこそす
れ、洲走りに砂を、近づて、水に攪はれるやうな憂
はない。

氣の軽い、のん氣な船は、件の別荘の、世に隔て
を置かぬ、たゞ夕顔の杖ばかり、四ツ目に結つた竹
垣の一重を隔てた。濡縁越の座敷から聞え来る三味
線の節の小唄の、二葉三葉、松の葉に軽く支へられ
て、流れもあへず、絹のやうな砂の上に漂つて居る
のである。

「此の何でもせい。」

住吉の岸邊の茶屋

に、よいやさ。」

と風體、恰好、役雑なものに名まで似た、因果小僧とも言いひさうな這奴六藏は、其の舷に腰を掛けた、が、舌打して、

「ちよツ面倒だ。宿錢は鏝でお定り、それ、」

と笠を、すぼりと落とし、次手に振分の荷を取つて、笠の中へ投げ込んで、

「いや、お泊りならばア泊らんせ、お風呂もどん／＼湧いて居る、障子も此頃はりかへて、畳も此頃かへてある。――嘘を吐きやあがれ。」

空手を組んで、四邊を見たが、がツくりと首を振つて、

「待てよ 青天井が黒光りだ。電は些と

氣が無えがね、二見ヶ浦は千疊敷、濱の砂は金銀

だらう、さうだろさうだろ然うである。成

程どん／＼湧いて居ら、伊良子ヶ崎までたつぷりだ。

あゝ、しかし暑いぜ。」

腕まくりを肩までして、
「よく皆、瓦の下の、壁の裡へ入つてやがる。」

瓦の下、壁の裡、別荘でも旅館でも、階下も二階も恁の温氣に、夕風の潮を避け、南うけに座を移して、伊勢三郎が物見松に、月もあらば盗むべく、神路山、朝熊嶽、五十鈴川、宮川の風にこがれて居らしい。ものゝ氣勢も人聲も、街道向は賑かに、裏手には湯殿の電燈の小暗きさへ、燈は海に遠かつた。

六藏ニヤノと獨笑して、

「お寢間のお伽もまけにするとー 姉さん、眞個かい、洒落だぜノ、洒落ぢやねえ。入らつしやい、お一方、お泊でございますよ。へい、お早いお着様で、難有う存じます。これ、御濯足の水を早くよ。あいノ、とおいでなさる。白地の手拭、紅い襪よ 柔な指で水と来りや、俺あ盥で金魚に化けるぜ。金魚うや、金魚う。」
と可い氣な賣聲。

「はてな、紺がすりに、紺の脚絆、をかしの色の金魚だぜ。畜生め、鯰ぢやねえか。勿ねる處は鮒だ奴さ。鮒だ、鮒だ、鮒侍だ。」

と胸を揺つて、ぐつと反つたが、忽ち肩ぐるみ頭をすくめ

「何を言やあがる。」

で、揚あしを左の股、遣違ひに又右て。燈は遠し、手探りを、何の氣もなく草鞋を解いて、ぴたりと揃へて、トンと船底へ突込むと、殊勝な事には、手拭の疊んで持ったをスイと解き、足の埃をはた／＼と拂つて、臀で楫を取つて、ぐるりと船の胸の間にのめり込む。

「御案内 あい／＼」

と自分で喚き、

「奥の離座敷だよ、船の間 ー」と

おいでなすつた。あゝ、住い見時、と言ひてえか、暗くツて薩張分らねえ。」

勝手な事を吐くうちに、船の中で胡坐に成つた。が兎が權を押さなればかり、狸が乗つた形である。

「何、お風呂だえ、風呂は留めだ。恚う見えても
餘り水心のある方ぢやねえ。はゝゝゝ、湯に水心も
可笑いか、どん／＼湧いてるは海だらう。――
すぐに御膳だ。膳の上で一銚子よ。分つたか。」

脱落もあるめえが、何ぞ一品、別の肴を見繕つて
よ、と仰せられる。「

と仰せられ、

「あゝ、いゝ酒だぜ、忠兵衛のおふくろかい、古
い所で 妙爛々々。」

と二つばかり額を叩く。

暢氣さも傍若

無人で、いづれ野宿の、こゝに寝て了ふつもりで居
よう。舩船を旅籠とより、名所を座敷にしたやうな
ことを吐す。が。僅か一時ばかり前、此の町通り、
両側の旅籠の前を、うろついて歩行いた折は、早や
日も落ちて、脚にも背にも、放浪の陰の漾つた、見
るからみじめな様子であつた。

黄昏に、御泊を待つ宿引女の、廂はづれの床凡に
 掛けて、島田、圓鬘、銀杏返、撫つけ髪の夕化粧、
 姿を斜に腰を掛けて、淺黄に、白に、紅に、ちら／
 へ手絡の色に通ふ、團扇の繪を動かす状、もの言ふ
 聲も媚かしく傾城町の風情がある。

浦づたひなる掃いたやうな白い道は、兩側に軒を
 並べた、家居の中を、あの注連を張つた岩に續く
 、松の蒔繪の貝の一筋道。

氷店、休茶屋、赤福賣る店、一膳めし、就中、鶉
 の鳴くやうに、けたゝましく往來を呼ぶ、貝細工、
 寄木細工の小女どもゝ、晝から夜へ日脚の淀みに商
 賣の逢魔ヶ時、一時鳴を鎮めると、出女の髪が黒く、
 白粉が白く成る。

優しい聲で、

「もし、お泊りかな。」

「お泊りやすえ。」

彼方でも、お泊りやす、此方でも、お泊りやす、
と愛嬌聲の口許は、松葉牡丹の紅である。

「泊るよ。」

其處へ、突掛けに紺がすりの汗ばんだ道中を持つ
て行くと、

「はい、お旅籠は上中下と三段にございますがな、
最下等にいたしましたしても」

何うして、こんな旅籠へ一宿出来よう、服装を見
ての口上に違ひないから。

「何だ。無價泊めようと云ふのぢやねえのか。」

「外を聞いておくんなはれ。」

「指揮は受けねえ。」

と肩を揺つて、のつさり通る。

「お泊りやす。」

「俺か。」

と又ずつと寄る。

「否、違ひまんの。」

「状あ見ろ、へん。」
と、半分白い目で天を仰いで、拗ねたやうに其の
まゝ素通。

此の邊とて、道者宿、木賃泊りが無いではない。
要するに、容子の好い婦人が居て、夕をほの白く道
中を招く旅籠では、風體の恁の如き、君を客にはし
ないのである。

荷も石瓦、古新聞、乃至、懷中は空つぽでも、一
度目指した軒を潜つて、座敷に足さへ踏掛くれば、
銚子を倒し、椀を替へ、此目魚だ、鯛だ、と贅を言
つて、按摩まで取つて、ぐつすり寝て、いざ出發の
勘定に、五錢の白銅一個持たないでも、皮はびくと
も爲るのではなかつた。

針が一本　　魔法でない。

此の六でなしの六藏は、元來腕利きの仕立屋で、
女房と世帯を持ち、弟子小僧も使つた奴。酒で崩し
て、賭博を積み、いかさまの目ばかり装つた、己の

名の旅雙六、花の東都を夜遁げして、神奈川宿のはづれから、早や旅錢なしの食ひつめもの、旅から旅をうるつくこと既にして三年越。

右様の勘定書に封すれば、洗つた面で、けろりとして、

「おう、仕立ものゝ用はねえか。羽織でも、袴でも。何にもなきや經帷子を縫つて遣ら。勘定は差引だ。」

女郎屋の朝の居残りに遊女どもの顔を剃つて、虎口を遁れた床屋がある。――それから見れば、旅籠屋や、温泉宿で、上手な仕立は重寶で、六の名は七同然、融通は利き過ぎる。

尤も仕事を稼ぎためて、小遣のたしにするほどなら、女房を棄てゝ流浪なんかしない筈。

からつけつの尻端折、笠一盞の着たツ切雀と云ふも恥かしい阿房鳥の黒扮装、二見ヶ浦に罫を搜して、

「お泊りだ、お一人さん！旅籠は鏝でお定り、そりや。」

と指二本、出女の目前へぬいと出す。

誰が封手に成るものか、黙つて動かす團扇の手は、浦風を軒に誘つて、背後から
鹽花々々。

四

六は門並六七軒。

風體と面構で、其の指二本突出して、二兩を二百に値切つても、怒つて喧嘩はしないけれど、誰も取合ふものはなし。

いざ、と成れば、法もかく、手心は心得たが、さ指當つて、腹は空く、汗は流れる、咽喉は乾く、水屋へ入る仕覺も無かつた。

すねた顔色、ふてた圖體、而して、身輕な旅人の笠捌きで、出女の中を伸歩行く、白徒の不敌らしさ。梁山泊の割符でも襟に縫込んで居さうだつたが、晩の旅籠にさしかゝつた飢と疲勞は、六よ、怒るなよ 實際餘所目には、ひよろついで、途方に暮れたらしく可哀に見えた。

此の後を、道の小半町、嬉しさうに、をかしさうに、視め、片頬笑みをしながら跟いて歩いたのは、糊のきいた白地の浴衣に、絞りの兵兒帶無雜

作さにぐるりと捲まいた、耳み許もとの青あ澄をんで見みえるまで、
頭か髪みのの艶つやのいゝ、鼻は筋なの通とつた、色いろの淺あ黒くろい、三十
四五の、すつきりとした男おとこで。

何ど處こにも白お粉しろの影かげは見みえず、下げ宿し屋ゆくの二に階かいから放はつ
出した書し生よらしいが、京か阪み地がにも東とう京きやうにも人ひとの知しつ
た、巽たつ辰み吉たつきちと云いふ名な題だいの伴やく優しや。

で、六ろくが砂すなまぶれの脚きゃ絆はんをすじりもじつて、別べつ荘さう
の門かどを通とほつたのと、一あ足ちが違ちがひに、彼かれは庭には下げ駄たで、小こ
石しを綺きれ麗いに敷し詰きつめた、間あひ々くに、濃こいと薄うすいと、すく
つて緋ひ色いろなのが、やゝ曇くもつて咲さく、松まつ葉ば牡ぼ丹たんの花はなを
拾ひろつて、其その別べつ荘さうの表おもての木き戸どを街かい道だうへぶらりと出でた。

巽たつは時ときに、酔あひざましの薬くすりを買かひに出でたのであつた。
客きやく筋くすぢと云いふのではない、松まつ坂さかの富ふ豪がう池い川けがとは、近ちか
い血ち筋すぢほどに別べつ戀こんな親しん類るあ交あ際ひ。東ひがしに西にしに興こう行ぎやうの都つど度ど、
日ひ取とりの都つ合が付つきさへすれば、伊い勢せ路ぢに廻まつて遊あそぶ
のが習ならひで、別わけて夏なつは、三か日かなり二か日かなり此こ處ゝに
來こない事ことはないのであつた。

今度も、別荘の主人が一所で、新道の藝妓お美津、踊りの上手なかるたなど、取巻大勢と、他に土地の友だちが二三人で、昨日から夜晝なし。

向う側の官營煙草、兼ねたり薬屋へ、づゝと入つて巽が、

「御免よ。」

「はい、お出でなさいまし。」

唯、側對ひの淡路屋の軒前に、客待うけの圓鬚に突掛つて、六でなしの六藏が、（おい、泊るぜえ）を遣らかす處。――考へても――上り端には萌黄と赤と上草履をずらりと揃へて、廊下の奥の大廣間には洋琴を備へつけた館と思へ――彼奴か風體。

傍見をしながら、

「寶丹はありますか。」

「一寸、ござりまへんで。」

「無い。」

「左様で、ござりません。仁丹が可うござります

やる。」

と夕間暮の薬箆笥に手を掛ける、とカチノと鳴る環とともに、額の抜上った首を振りつゝ大な眼鏡越にじろりと見る。

「寶丹が欲しいんだがね。」

「強い、お生憎様で。」

「お邪魔を。」

「何うだ、姉え、此だけぢや。」

六は再指二本。

此の、笠ぐるみ振分けを捲り手の一方へ、禪も見える高断折、脚絆ばかりの切草鞋で、片腕を揮つたり、擧げたり、鼻の下を擦つたり、べかこと赤い目を剥いたり、勝手に軒をひやかして、ふらノと街道を伸して行くのが、如何にも舞臺馴れた演種に見えて、巽はうかノ、獨笑して其の後に續いたのである。

やがて一町出はづれて、小松原に、紫陽花の海の見える處であつた。

「君、君。」

何と思つたが、巽が其の六でなしを呼んだのである。

「えゝ、手前で、へい。」

と云ふと、ぎつくり腰を折つて、膝の處へ一文字に、つんと伏せた笠の上、額を着けさうにして一ツおじぎをした工合が、丁寧と言へば丁寧だが、何とも人を食つた形に見える。

辰吉は片頬笑して、

「突然で失禮ですがね、何處此處と云つてるよりか、私の許へ泊つちや一何《どうです。》」

「へい、貴方へ。」

と、俯向けて居た地薄な角刈の頭を擡げて、はぐらかす氣か、汗ばんだか、手の甲で目を擦つて、ぎ

ろりと異の顔を見た。

「何うです、泊りませんか　ツたつてね、

私も實は、餘所の別荘に食客と云ふわけだが、大腹な主人でね、戸締りもしない内なんだから、一晚、君一人ぐらゐ、私が引受けて何うにもしますよ。」

「へへへ、御串戯を。」

と道の前後をニ附して、苦笑ひをしつゝ、一寸頭を搔いたは、扱は、我が舉動を、と思つたらう。

「串戯なもんですか。」

其處が水菓子屋の店前で　――　異は、別に他に見當らなかつたので、　――　居合す小僧に振向いて、最う一軒薬屋はないか、と聞いて、心得て出て、更めて言つた。

「眞個だよ、君。」

と笑ひながら、　もう向うむいて行きか

ける六藏を再呼んで、

「　今君が通つて来た、あの、旭館と淡

路屋と云ふ大な旅館の間にある、別荘に居るんだからね。」

「何とも難有え思召で、へい。」

と、も一度笠を出して面を伏せて、

「いづれ又」

「では然やうなら。」

「御機嫌よろしう。」

二見ヶ浦を西、東。

思ひも掛けない親船に、六はゆすぶつた身體を鎮めて、足腰をしゃんと行く。

「兄さん、兄さん。」

「親方。」

と若い女が諸聲で、やゝ色染めた紅提灯、松原の茶店から、夕顔別當、白い顔、絞の浴衣が、翻然と出て、六でなしを左右から。

「親方。」

「兄さん。」

「えゝ、俺が事か。兄さん、とけつかつたな。聞
馴れねえ口を利きやあがる。幾干で泊める。恚う、
旅籠は幾干だ。」

「否、宿屋ぢやありません。まあ、お掛けなさい

な。

「よう一寸。」

「何にも持たねえ、茶代が無えぜ。」

「何んですよ、そんな事は。」

「はてな、聞馴れねえ口を利きやあがる。」

「其の代りね、今、親方、其處で口を利いたでせ

う。

「一寸、あの方は何と云つて。矢張り普通の人間

とをんなじ口の利き方をなさる事？ 一寸さあ

と衣紋を抜く。」

六藏解めぬ面の眉を顰め、

「何だ、人間の口の利方だ？」

ほい、ぢ

や、ありや此處等の稻荷様か。」

「まあ！」

「何だい？」

「あら、名題の方ぢやありませんか、巽さんと云ふ俳優だわよ。」

「畜生め、此奴等、道理で騒ぐぜ。むゝ、素顔にやはじめてだ。」

と、遠くを行く辰吉のすらしとした、後姿に伸上る。

「可いわねえ。」と、可厭な目色。

「黙つてる。俺も恚う見えて江戸兒だ。巽の假聲がうめえんだ。」

「あら、嬉しい。ひい！」と泣聲を放つたり。

「馳走をしねえ、聞かして遣ら。二見中の鮑と鯛を背負つて来や。熱爛々々。」

と大手をふつた。

これぢや頓て、鼻唄も出さうである。

「もし／＼、貴方。」

と媚かしい聲。

溝端の片陰に、封袋を切つて晃乎とする、薬の錫を捻くつて、伏目に辰吉のイんだ容子は、片頬に微笑さへ見える。四邊に人の居ない時、恚うした形は、子供が鐵砲玉でも買つて來たやうに、邪氣無いものである。

水菓子屋で聞いた薬屋へ行くには、彼は、引返して別荘の前を又通らねば成らなかつた。それから路を折曲つて、草生の空地を抜けて、まばら垣について廻つて、停車場方角の、新開と云つた場末らしい、青田も見えて藁屋のある。其の中に、廂に唐辛子、軒に橙の皮を干した、百姓家の片商賣。

白髪しらの葉はが目めを光ひからして、見みるなよ、見みるなよ、と言いひさうな古納戸ふるなんどめいた裡なかに、字じも繪ゑも解わからぬ大衝おほつ立たてを置おいた。

寶丹ほうたんは其處そこにあつたが、不思議ふしぎに故郷こきやうに遠とほい、旅たび

にある心地がして、巽はふと薄い疲労さへ覺えた。
道もやがて別荘の門から十町ばかり離れたらう。

右から左に辨ずる筈を、恚うして手に入れた寶丹
は、心嬉しく、珍らしい。

「あの、お薬をめしあがりますなら、お湯か何ぞ
差上げますわ。」

唯、片側の一軒立、平屋の白い格子の裡に、薄彩
色の裾をばかした、艶なのが、繪のやうに覗いて立
つ。

黒髪は水が垂りさう、櫛巻の房りとした、瓜核顔
の鼻筋が通つて、眉の恍惚した、優しいのが、中形
の浴衣に黒繻子の帯をして、片手、其の格子に掛け
た、二の腕透いて雪を欺く、下緊の淺葱に挟んで、
――玉の忍の茶室圍を起つた。――緋の袱
紗、と見えたのは鹿子絞の撥袋。

片手に象牙の撥を持つたまゝで、巽に聲を掛けた

のであるし薬くすりの錫すんを持もつたなり、浴衣ゆかたの胸むねに掌てを當あて、其その姿すがたを見みたが、通とほりかゝりの旅人たびびとに、一夜やを貸かさうと云いつた矢先やさき、巽たつみは怪あやしむ氣きもしないで、

「恐おそれい入いりますな。」

「さあ何どうぞ。」

と云いつて莞爾にっこりした。が、撥ばちを擧あげて麤あらくほを隠かくすと、向むかうむきに格子かうしを離はなれ、細ほつそりした襟えりの白しろさ、撫肩なでがたの媚なまめかしさ。浴衣ゆかたの千鳥ちどりが宙ちゆうに浮ういて、ふつと消きえる、とカチリと鳴なる 何處どこかに撥ばちを置おいた音おと。

すぐに、上框あがりがまちへすつと出でて、柱はしらがくれの半身はんしんで、爪尖つまさきがほんのりと、常夏とこなつあは淡あはく人ひとを誘さそふ。

巽たつみは猶なほ構かまはず格子かうしを開あけた。

「ぢやあ御免ごめんなさいよ。」

と、土間どまに釣つつた未だ灯ひを入いれない御神燈ごしんとうに蔦つたの紋もん、鶴澤つるさは宮歳みやとしとあるのを讀よんで、あゝ、お師匠ししやうさん、と思おもふ時とき、名なの主ぬしは 早はや次つきの室まの葭戸よしど越こし、後姿うしろすがたに、薄うすりと鐵瓶てつびんの湯氣ゆげをかけて、一處浦とこらうらの波なみが 月つきに霞かすんだやうであつた。

「恐入ります。」

婦は聲を受けて、何となく、なよやかな袖を揺がしながら、黙つて白湯を注いで居る。

「拝借します。」

と巽は其處の上框へ。

二つ三つ、すら／＼と疊觸り。で、遠慮したか、葭戸の開いた敷居越に、携ふやうな膝を支いて、框の隅の柱を楯に、少し前屈みに身を寄せる、と繻子の帯がキクと鳴る、心の通ふ音である。

「温湯にいたしましたよ、水が悪うございますか

ら。」

「御深切に。」

取つた湯呑は定紋着、蔦を染めたが、黄昏に、薄りと蒼ずむと、宮歳の白魚の指に、撥袋の緋が残る。

「あゝ、私。」

「と、ばらりと落すと、下褌の端にちらめいて、瞼に颯と色を染めた、二十三四が艶なる哉。」

「私、何うしたらいいでせう。極りが悪うござんすわ。」

と婦は軽く呼吸を継いで、三味線の糸を弾くが如く、指を柱に刻みながら、

「私、お知己でもないお方をお呼び申して、極りが悪いものですから、何ですか、ひとりで慌て了つて、御茶臺にも氣が付きません。そんな

自分の湯呑でなんか。失禮な、

まあ、何うしたら可うございませうね。」

と襟を壓へて俯向いて、撥袋を取つて背後に投げたが、留南寄の薫が颯として、夕暮の奇しき花、散らすに惜しき風情あり。辰吉は湯呑を片手に、

「何うしまして、結構です。難有う。そしてお師匠さん。貴女の藝にあやかりませう。」

「存じません。」

と、又一刷毛臉を染めつ、

「人様御迷惑。蚊柱のやうに唸るんでございます

もの、そんな湯呑には子子が居ると不可ません。お打棄りなさいましよ。唯今、別のを汲替へて差上げ

ますから。」

と片手をついて立構す。

辰吉は壓へるやうに、

「あゝ、しばらく。貴女がそんな事をお言ひなすつちや私は薬が服めなく成ります。此の圖體で、第一、寶丹を舐めようと云ふ柄ぢやないんですもの。鯨や鯨と掴合つて、一角丸を棒で嚙らうと云ふまどろすぎやありませんか。」

婦が清い目で、口許に嬉しさうな笑を浮べ、流眇に一寸見て、

「まあ、さうしてお商賣は、貴方。」

「船頭でさあね。」

一寸！ 池川さんのお遊び道具の、あの釣船ばかりお漕ぎ遊ばす

お帥匠さんは御存じだ。

「雑と、人違ひですよ。」

と眦を伏せてぐつと呑んで、

「申兼ねましたが、もう一杯。丁ど咽喉が渴いて

困つて居た、と云ふ處です。」

艶なお師匠さんは、いそ／＼して、

「お出ばなにいたしませうね。」

「薬を服みました後ですから、お湯の方が結構です。――何ですか、お穩古は日が暮れてからですか。あゝ、いや、其で結構。」

辰吉は鏘のある粹な笑で、

「はゝゝ、些と厚かましいやうですな。」

「澤山おつしやいまし。――否、最う片手間の、あの、些少の眞似事でございます。」

「お呼び申せば座敷へも？」

「可厭でございますねえ、貴方。」

と片手をがみの指が撓つて、

「そんな御義理を遊ばしちや、それぢや私申譯がありません。それで無くつてさへ、お通りがかりをお呼び申して、眞個に不躑だ、と極りが悪うございましてね、赫々逆上ますほどなんですもの。」

身を恥ぢるやうに言譯がましく、

「實は、あの、小婢を買ものに出しまして、自分
でお温習でもしませうか、と存じました處が、窓の
貴方、葱の露の、大きな雫が落ちますやうに、螢が
一つ、飛ぶのが見えたんでございますよ」

「螢。」

と異は、聲に應じて言返した。

「はあ、時節は過ぎましたのを、つい、珍しい。
それとも一ツ星の光るお姿が知ら、と然う思つて立
つたんですが、うつかり私、撥なんか持つて、螢だ
つたら、それで叩きますつもりだつたんでせうかね
え。そんな了簡で、螢なんて、蜻蛉か蝙蝠で澤山で
ございます。」

蜻蛉は寢たから御存じあるまい、軒前を飛ぶ蝙蝠
が、べかこ、と赤い古を出して、

「此は御挨拶だ。」
と翻然と行る。

「それですから、ふつと、其の格子を覗きました
 時は、貴方の御手の御薬の錫をば、あの、螢をおつ
 かまへなすつた、と見ましたんですよ。」

器は巽の手に光る。

彼は掌に据ゑて熟と視た。

「まあ、お鹽梅が澤山悪いんぢやありませんか、
 何しろお上りなすつて、お休みなさいましたら何
 うでせう。貴方、御気分は如何です。」と、摺寄
 つて案じ顔。

巽は眉の凜とした顔を上げて、

「否、気分は初めから然したる事も無いのです。

寶丹は道樂に買った、と云つて可いくらゐなんです
 が。」

爾時、袂へ突込んで、

「今の、螢には、何だか少し今度は係合がありさ
 うですよ。——然うですか、螢を慕つてお師匠さ

ん、貴女格子際へ出なすつたんだ。」

「貴方のお口から、そんな事、お人の悪い、慕つて、と云ふ柄ぢやありません。」

「まあ、さすがね、私が寶丹を買ひに出たはじまりが、矢張り螢ゆゑに」

と云つたやうな譯なんですよ。ふつと、今思出したんです

「へえ。」

と沈んだやうな聲で言ふ、宮歳は襟を合せた。

「今度、當地へ來ます時に、然うです。興津

東海道の興津に、夏場遊んでる友だちが居て、其處へ一日寄つたもんです。夜汽車が涼しいから、十一時過ぎでした、あの驛から上りに乗つたんですよ、右の船頭が。」

「はあ、可うございます。ほ。」

と笑が散らぬまで、そよ／＼と淺黄の團扇の風を送る。

指環の眞珠が且つ涼しい。

「頂戴しますよ。」

と出してあつた薄お納戸の麻の座蒲團をこゝで敷いて、

「小さな革靴一つぶら下げて、プラツトホオムから汽車の踏段を踏んで、客室の扉を開けようとする
と、ほたりと。」

巽は口許の片頬を壓へて言つたのである。

「蟲か来て此處へ留つたんです、すつと消え際の弱稲妻か、と思ひました。目前に光つたんですから吃驚して、邪険に引拂ふと、最う汽車が動出す。」

妙にあとが冷つくのです、濡れてるやうにね、擦つて見ても何ともないので。忘れて居ると、時々

冷い。何か、かぶれでもしやしないか知ら、螢だと思つたものゝ、それとも出合頭に、別の他の毒蟲で、

もありはしないかと、一度洗面臺へ行つて洗ひましたよ。彼處で顔を映して見ても別に何事もないので、そのうちに紛れて了ふ。それでも汽車で、うと／＼と寝た時には、清水だの、川だの、大な湖だの、何でも水の夢ばかり切々に見ましてね、繋ぎに目が

覺める、と丁ど天龍川の上だつたり、何處かの野原で、水が流れるやうに蟲の鳴いてた事もありませんがね。最う別に思出しもしないで、つい先刻までそれ切りで済んで居ました」。

今しがたです

池川さんの、二階で、

と顔を見合せた時、兩方で思はず頷く様な瞳を通はす、ト壓へた手を膝にして巽は又笑を含んで、

「釣舟にして置ませう、其の舟のね、

表二階の方へ餉臺を繫いで、大勢で飲酒ながら遊んで居たんですが、景色は何とも言へないけれど、暑いでせう。此の暑さと云つたら暑さが重石に成つて、人間を、ずんと上から壓付けるやうです。窓から見る松原の葭簀茶屋と酸漿提灯と、其の影がちら／＼砂に溢れるやうな緋色の松葉牡丹ばかりが、却つて目に涼しい。海が焼原に成つて、仕方がない、それぢや生命も續くまいから、陸の方の青い草木を水にして置け、と天道の御情けで、融通をつけて下さると云つた陽氣ですからね。」

「まあ、随分、ほ／＼、もう自棄でございますわ

ね、こんなに暑くつちや。
「
其の癖、見る目も涼しい黒髪。」

「些^{ちつ}とでも涼^{すず}しい心^{こころ}持^{もち}に成^なりたくツて、其^{そこ}處^{ところ}等の木の葉^はの青^あいのを熟^{じつ}と視^みて居^ゐて、其^その目^めで海^{うみ}を見^みると、漸^{やっ}と何^どうやら水^{みづ}らしい色^{いろ}に成^なります。

でない^でいと眞^ま赤^つですぜ。目^{ひざかり}盛^ひなんざ火^{なみ}が波^{なみ}を打^うつて居^ゐるやうでせう。―― さあ、然^さうなると不^ふ思^し議^ぎなもの^なで今^{いま}も言^いつた通^{とほ}りです。潮^{うしほ}煮^ほの鯛^{たひ}の目^め、鮑^{あはび}の蒸^むしたのが涼^{すず}しさうで、熱^{あつかん}爛^{らん}の酒^{さけ}がヒヤリと舌^{した}に冷^{つめた}いくらゐる。―― 貴^{あなた}女^なが云^いつた自^や棄^けですか。――

夕^{ゆふ}方^{がた}、今^{いま}しがた一^{ひと}時^{とき}は、屈^なの絶^{ぜつ}頂^{ちやう}で口^{くち}も利^きけない。餉^{ちやぶだい}臺^{たい}を圍^{かこ}んだ人^{ひと}の話^{はなし}聲^{こゑ}を、じり／＼と響^{ひび}くやうに思^{おも}つて、傍^{わきめ}目^めも觸^ふらないで松^{まつ}原^{はら}の松^{まつ}を見^みて居^ゐて、其^その目^めをやがて海^{うみ}の上^{うへ}に恚^かう返^{かへ}すと、

巽^{たつみ}は目^めを離^{はな}して指^{ゆびさ}したが、宮^{みやとし}歳^{とし}の顔^{かほ}を見^みて、錆^さびた聲^{こゑ}して低^{ひく}く笑^{わら}つた。

「はゝゝゝ、ベツかつこをするんぢやありません

よー。然うすると、海の色が朝からはじめて、
颯と一面に青く澄んで、それが裏座敷の廻縁の總欄
干へ、ひた／＼と簾を流すやうに見えましてね、縁
側へ雪のやうな波の裾が、すつと柔かに、月もない
のに光を誘つて、遙かの沖から、一よせ、寄せるや
うな景色でした。

悚と涼しく成ると、例の頬邊が冷りとなりました、
螢の留つた處です。――裏を透して、口の裡へ、
眞珠でも含んだかと思ふ、光るやうに胸へ映りまし
た。

敷居に凭れかゝり、團扇を落して聞いて居た婦は、
膝の手を胸へ引いて、肩を細く袖を合せた。

「可厭な心持ぢやなかつたんです――それが、
しかし確に、氷を一片、何處かへ抱いたやうに急に
身を冷して、つる／＼と融るらしく、背筋から冷い
汗が流れました。香がします、水のやうな、あの、
螢の。」

月の柳の雫でも夜露となれば身に染みる。

「私は何かに打たれたやうに、フイと席を立つて戸外へ出ました。まだ明い。内の二階で、波ばかり、青く欄干にかゝつたやうには、暮れては居ません。

名所圖繪にありさうな人通りを見て居ると、最う何もかも忘れました。が、寶丹は用心のために、柄にもない船頭が買ったんですが。

今の螢のお話で、無遠慮に御厄介に成りました。申譯にもと、思ひますから、――私も、無理に附着けたらしいかも知れませんが、螢の留つたお話をしたんです。」

と半ば湯谷のあとを飲むと、俯目に紋を見て下に置いた。彼は歸りがけの片膝を浮かしたのである。

唯、呼吸を詰めて、

「貴方。」

「え。」

餘り更まつた婦の氣に引入られて驚いた體に沈

んで云つた。

婦をんなは肩かたを絞しほるやうに、身ふをしめた手てを胸むねに、片手かたてを肱ひじに掛かけながら、

「螢ほたるぢやありませんわ。螢ほたるぢやありませんわ。」

「何がなにですえ。」

「そりや、あの何なんですよ、吃きつと

そして、其その別荘べっさうのお二階かいへ、沖おきの方ほうから來きましたつて、蒼あをい、蒼あをい、蒼あをい波なみは。」

柱はしらの姿すがたも蒼あを白しろく、顔かほの色いろも佛おもかげ立つて、

「お話をはなし伺つかひますうちにも、私わたしは目めに見みえますやうで。そして、跡あとを、貴方あなたの跡あとを追おつて浪打なみうち際ぎはが、其處そこへ門もんまで參まゐつて居ゐるやうですよ。」

と、黒くろ繻子ぢゆうすの帶おびの色いろ艶つややかに、夜よを招まねいて伸上のびある。白しろい犬いぬが門かどを駈かけた。

辰吉たつきちは腰こしを掛かけつゝ、思おもはず足あしを爪つまだ立てた。

「貴方、其の欄干にかゝりました眞蒼な波の中に、あの撫子の花が一束流れますやうな、薄い紅色の影の映つたのを、もしか、御覧なさはしませんか。」

と云いふ、瞳の色の美しさ、露を誘つて明いまで。其の色に誘はれて、婦が棄てた撥袋の鏡臺の端に掛つたのを見た。

我にもあらず茫と成つて、

「彼處に見える あれですか。」

「否、あんなものぢやありません。」 とやゝ氣組んで言ふ。

「それでは？」

「否、絹の色なんです。―― 那時あの妓―― は緋の長襦袢を着て居ました。月夜のやうな群青に、秋草を銀で刺繍して、ちら／＼と黄金の露を置いた、薄いお太鼓をがっくりとゆるくして、羅の裾を敷いて、亂次なさつたら無い風で、美しい足袋銚足で、其のまゝスツと、あの別荘の縁を下りて、眞

直すくに小石こいしの裏庭うらにはを突切つつきると、葉はのまばらな、花はなの大おほきなのが薄化粧うすげしやうして咲さきました、「と言いふ

大輪だいりんの雲ゆきは、其その裊つまを載のせる翼つばさであつた。

「あの、夕顔ゆがほの竹たけの木戸きどに、長ながい袂たもとも觸ふれないで、細ほっそりと出でたでせう。松まつの樹きの下したを通とほる時ときは、遠とほい路みちを行ゆくやうでした。舟ふねの縁へりを傳つたはると、あれ、船首みよしに紅あかい扱し帯きが懸かる、ふら／＼と蹠よろけ跟げたんです 酷ひどく酔よつて居ゐりましたわね。

立直たちなほつた時とき、すつきりした横顔よこがほに、纏もつれながら、島田しまだ鬚すげも姿すがたも据すわりました。

私わたしは爾時そのとき、隣家となりの淡路館あはぢかんの裏うらにあります、ぶらんこを掛かけました、柱はしらの處ところで見みて居ゐたんですよ、一昨をとつ年しですわね、——巽たつみさん。」

と、然しかも震ふるを帶おびた聲こゑで、更あらためて名なを呼よんで、

「貴方あなたに焦こがれて亡なく成なりました、あの、——

小雪こゆきさん —— の事ことですよ。」

實に、それは、小雪は伊勢の名妓であつた。

辰吉は、ハツと氣を打つて胸を退いた。片膝揚げつゝ、框を背後へ、それが一浪乗つて揺れた風情である。

褙に曳いたも水淺黄、團扇の名の深草ならず、宮歳の姿も波に乗つてぞ語りける。

「不思議ですわね、那時、海が迎ひに来て、渚が、小雪さんに近く成ると、もう白足袋が隠れました。蹴出しの褙に、藍がかゝつて、見渡す限り渚が白く、海も空も、薄い萌黄でござんした。

其處に唯一人、あの妓が立つたんです。笄がキラ／＼すると、脊の婀娜とした、裾の色の紅を、潮が見る／＼消して青くします。浪におされて、羅は、その、あの蹴出しにしつとり離れて、取亂したやうですが、あゝした品の可い人ですから、須磨の浦、明石の濱に、緋の袴で居るやうでした。」

驚破泳ぐ、と其の時、池川の縁側では大勢が喝采した。――

「あれ／＼渚を離れる、と浪の力に裾を取られて、羅の其のまんま、一度肩まで浸りましたね。衝と立つ時、遠浅の青畳、真中とも思ふのに、錦の帯の結び目が颯と落ちて、夢のやうな秋草に、濡れた銀の、蒼い露が、雫のやうに散つたんです。

まあ、顔が真蒼、と思ふと、小雪さんは熟と沖を凝視めました、――其處に――貴方のお頭と真白な肩のあたりが視えましたよ。

近所を漕いだ屋根舟の揺れた事！

貴方は泳いで在らしたんです。

真裸の男まじりに、三四人、私の知つた藝者たちも五六人、ばら／＼と濱へ駈けて出る。中には舫つた船に乗つて、両手を舉げて、呼んだ方もござんした、が、最う其の時は波の下で、小雪さんの髪か亂れる、と思ふ。海の空に、珠の簪の影か知ら、晃々――ツ星が見えました。」

「其の裸體なのは別荘の爺やさんでございました
つてね。」

「然やう治平と云ふ風呂番です。」と言ひなが
ら、巽の面は面の如く瞳が据つた。

灯なき御神燈は、暮迫る土間の上に、無紋の白張
に髣髴する。

「爺さんが海へ飛込んで、鉛の水を掻くやうに、
足掻いて、波を分けて追掛けましたわね。」

丁ど沖から一波立てて、貴方が泳返しておいでな
さいます ー

あとで、貴方がお話しなすツたつて あ
の、承りましたには、仰向けに成つて、池の下の小
雪さんが、嚙ぞ苦しかつたでせう、乳を
透して紺の紅い、其處の水が桃色に薄りと搦んで
居る、胸を細く、両手で軽く襟を取つて、坡けさう

にして居たのか、貴方が其の傍にお寄りなさいました。燗りに、すつと立つて、鬚に水をかぶつて居て、貴方の胸へ前髪をぐつちより、着けました時、あの、うつくしい白足袋が、――丁ど咽喉の處へ潮を受けてお起ちなすつた、――貴方の爪先へ、ぴたりと揃つた、と申すぢやありませんか。」

「異は框をすつくと立つた！」

「吃驚なすつて、貴方は、小誓さんの胸を敷いて、前へお流れなさいましたつてね。」

「そして驚いて水を飲んだ、今も一齊に飲むやうな氣がします。」と云ふ顔も白澄むのである。

「其處を爺さんが抜切つて、小雪さんを抱きました。ですけれども、最う其の時、あの妓の呼吸は絶えて居たのです。――あの日は、小誓さんは、大變にお酒を飲んで居たんですつてね、茶碗で飲んで、杯洗まであけたんださうですね。深酒の上に、急に海へ入つたもんですから、血が留つて了つたんでせう。」

そして、死體に成つてから、貴方のお胸に縋着いたんぢやあり、ませんか、海の中で、
と膝を寄せる、褙が流れて、婦は異の手を取つた。

指が觸ると、掌に、婦の姿は頸の白い、翼の青い、怪しく美しい鳥が留つたやうな氣がして、異の腕は萎えたる如く、往來に端近な處に居ながら、振排ふことか出来なかつた。
四邊を見ると、次の間の長火鉢の傍なる腰窓の竹を透いて、其處が空地らしく幻の草が見えた。

「異さん。」

「あの、風呂番の爺さんは、其のまゝ小雪さんを負ひ返して、何しろ、水浸しなんですから、すぐにお座敷へは、と然う思つたんでせう。一度、あの松に舫つた、別荘の船の中へ抱下しましたわねし雲に濱も美しい
小雪さんの裙を長く曳いた姿が、頭髮から濡れてしを／＼と舷に腰を掛けました。あの、白いとも、蒼いとも玉のやうに澄んだ顔。紅も散らない唇から、すぐに、吻と息が出ようと、誰

も皆思つたのが、一呼吸の間もなしにバツタリと胴の間へ、島田を崩して倒れたんです。お浴衣ぢやありましたけれど、其處にお帯と一所に。」

と婦は情に堪へないらしく、いま、巽の帯に、片頬を熟と。一息して、

「貴方のお召ものが脱いで置いてありました。婦の一念 最うそれですもの。」

はお迎ひに行つたんですよ。欄干にかゝりました二見ヶ浦の青い波は、沖から、逢ひに来たんです。

不便とお思ひなさいまし。小雪さんは一言も何にも口へは出さないで、こがれ死をしたんです。

素振、氣振が精一杯、心は通はしたでせうのに、普通の人より、色も、戀も、百層倍、御存じの貴方で居て、些とも汲んでお遣んなさらない！

否、小雪さんの心は、よく私が存じて居ります。

ー 俺は知らない、迷惑だ、と屹と貴方は、然うおつしやいませうけれど、藝妓したつて、女ですもの、分けて、あんな、おとなしい、内氣な小雪さんなんですもの、打ちつけに言出せますか。

察さつしておいで遊あそばしながら、――いつも御ご鼻ひい
屑きを受けて居ゐましたものですから、池いけ川がはさんの、内ない
證しよの御お籠きに妓いりでもあるやうにお思おもひなすつて、其その
義ぎ理りで、あれだけに焦こがれたものを、かな
へてお遣やんなさらない。

堅かた氣ぎは然さうぢやあござんすまい、恚かうした稼か業げふの
果は敢かい事ことは、金か子ねの力ちからのある人ひとには、屹きつと身みを任まかせ
て居ゐる、恚おも思もはれます。

御お酒さけの上うへのまゝ事ことには、團うち扇はと枕まくらを寢ねかして置おい
て、釣つり手てを一ひとツ費あ方なたにまかして、二ふ人たりで蚊か帳やも釣つり
ましたものを。――と言いふ。

其その蚊か帳やのやうな、海うみのやうな、青あいものが、さ
ら／＼と肩かたにかゝる、と思おもふと、いつか我わ身がは又また框かまち
に掛かけつゝ、女をんなの顔かほが弗ふつと浮ういて、空そらから熟ぞつと覗のぞい
たのである。

「此が俳優なの。」

「まあ。」

しよる／＼、浪が髡るやうな、ひそ／＼と耳に囁く聲。

松原の茶店の婦の、振舞酒に酔ひ痴れて、別荘裏なる舫船に鼻唄で踏反つて一寢入りぐツと遣つた。

が、こんな者に松の露は掛るまい、夜氣にこそぐられたやうに、むず／＼と目覺めた六藏。胴の間に仰向けで、身うちが冷える。唯、野宿には心得あり。

道中笠を取つて下腹へ當がつて、案山子が打倒れた形で居たのが。――はじめは別荘の客、巽辰吉が、一夜の宿をしゃうと云つた、情ある言を忘れず、心に留めて、六が此處に寢たのを知つて、（と思つた。船に苦を貰いてくれるのぢやないか。）

舷へ、かた／＼と何やら嵌込む

其の嵌

めるものは、漆塗の艶やかな欄干のやうである、

はてな、ひそめく聲は女である。

うまれながらにして大好物。寝た振で居て目を働かすと、舷に立かゝつて綺麗な貝の形が見える、大きな蛤。

それが、其の貝の口を細く開いた奥に、白銀の朧なる、たとへば眞珠の光があつて、其の影が、幽に暗夜に、ものゝ形を映出す。

「藝妓が化けたんだ、そんな姿で踊でも踊つて居たらう。」

時に、そんなのが一個ではない。左舷の處にも立つて居る。此も同じやうに、舷へ一方から欄干らしいものを嵌めた、かたり、と響く。

外にもまだ居る 三四人、皆おなじ蛤の姿である。

「祭禮の揃かな、蛤 提灯 ー ー こんなの
河豚も榮螺もある、畑のものぢや瓜もあら。
茄子もあら。」

但し其の提灯を持つて居るものゝ形は分らぬ。が、
蛤の姿である と云ふのが、衣服、其の袖、
其の帯と思ふ處がいづれも同じ蛤で、顔と見るのが
蛤で、目鼻と思ひ、口と思ふのが蛤で、そして灯が
蛤である。

襟か袖かであるらしく、且つ暗の綾の、薄紫の影
が籠む。

時にかた／＼と響いて、二三人で捧げ持った氣勢
がして、婦の袖の香立蔽ひ、船に柱の用意があつて、
空を包んで、トンと据ゑたは、屋根船の屋根めいて、
それも漆の塗の艶、星の如き唐草の蒔繪が散つた。
左舷右舷も青貝摺。

六藏は雛壇で見えて覚えのある車のやうだ、と偶と
思ふ。

時に、蛤が口を開いた。否、提灯が、眞珠の灯を
向けたのである、六の顔へ――そして女の聲で
言つた。

「此これが伴やくしや優ななの？」

「まあ。」

「醜きたない伴やくしや優だわね。」

「――まゝにしろ、此こ奴いつら等ら――と心こゝろの裡うちで、

六藏ざうは苦にがり切きる。

「まだ、來きて居ゐやしまいと思おもつたのに、」

「そして、寢ねて居ゐるんだもの、情じやうのない。」

「心しん中ぢゆうの對あ手ての方かたが、さきへ來きて寢ねて居ゐるなん

て。」

「ねえい」

と應おうじて、呆あきれたやうに云いつた、と思おもふと、ざつ

と浪なみが鳴なつて、潮しほが退ひいたらしく寂ひつそ寞わする。

欄干らんかんも、屋根やねも、はつと消きえて、蒔繪まきゑも星ほしも眞しんの

暗闇やみ。

直すぐに、ひた／＼、と聲あしおと音として、誰だれか舷ふなばたへ來きたら

しい。

透通^{すきとほ}るやうな聲^{こゑ}か、露^{つゆ}に濡^ぬれて、もの優^{やさ}しい濕^{しづみ}を
帯^おびつゝ、

「 異^{たつみ}さん。 」

途端^{とたん}に、はつと衣^{きね}の香^かと、冷^{つめた}い黒髪^{くろかみ}の薰^{かぎり}がした。

「 あゝれ、違^{ちが}つて

違^{ちが}つて居^ゐるよう。 」

蛤の灯がほんのりと、再来て

「お退きよ、退いておくれよ。」

「よう、お前。」

と言ふ。人をつけ、蛤なんぞに、お前

呼ばはりをされる兄哥でないぞよ。

「此處は、今夜用がある。」

「大事の處なんだから。」

「よう。」

「仕やうがない。ね、酔つぱらつて。」

「臭い事。」

「憎らしい、松葉で突ついで遣りませう。」

敏捷い、お轉婆なのが、すつと幹をかけて枝に登つた。呀、松の中に蛤が、明る眞珠を振りむと
一時、一時、雨の如く松葉が灌ぐ。

「お、痛。」

「何うしたの。」

と下から云ふ。

松の上なが、興がつた聲をして、

「松葉が私を擽るわよ、おほゝ、おほゝ。」

「わはゝ。」

と濱の松が、枝を揺つて哄と笑ふ。

「きやつ。」

と我ながら猿のやうな聲して笑つて、六藏はむつくと起きて、

「姉等、仕立ものゝ用はねえか。」

と、きよとんとして四邊を視た。

淺黄を翻す白波や。

燃ゆるが如き緋の裳、浪にすつくと小雪の姿。あの、顔の色、瞳の艶、――戀に死ぬ身は美しや、島田のまゝの星である。

蛤か六つ七つ、むら／＼と渚を泳いで、左右を照らす、眞珠の光。

凄じいほど氣高い顔が、一目、怨めしさうに六藏の面を視て、さしうつむいて、頸白く、羅の兩袖を胸に犇と掻合す、と見ると浪が打ち、打ち重つて、裳を包み、帯を出し、胸をかくし、島田鬚の浮んだ上に、白い潮がさらり、と立つ。と磯際の高波は、何とて其のまゝ沖に退くべき。

颯と寄る浪がしら、雪なす獅子の毛の如く、別荘の二階を包んで、眞蒼に光る、と見る、と此の小舟は揺上つて、松の梢に、ゆらりと乗るや、尾張を越して富士山が向うに見えて、六藏素天邊に仰天した。

這奴横紙を破つても、縦に舟を漕ぐ事能はず、剩へ櫓櫂もない。

「わあゝ、助けてくれ、助船。」
「何うしました、何うした。」

人目を忍んで、暗夜を宮歳と二人で来た、巽は船のへりに立つと、突然跳起きて大手を擴げて、且つ船から轉がり出した六藏のために驚かされた。

菩提所の――巽は既に詣ではしたが――
其處ではない。別荘の釣舟は、海に擲れた小雪が魂
をのせた墓である。

「小雪さんを私と思つて。」

あの、船で手を取つて、あはれ、生命掛けた戀人
の、口づから、切めて、最愛い、と云つて愛い、可
哀相とだけでも聞かし給へ。

御神燈は未だ白かつたのに、夜の暗さ、別荘の門、
街道も寢静まる、夢地を辿る心地して、宮歳のかよ
わい手に、辰吉は袖を引かれて來たのであつた。

「へい、什立ものゝ御用はねえかね。」
きよろん、とした六藏より、巽は却つて茫然とし
た。

宮歳の姿は、潮の香の漾ふ如く消えたのである。

別荘の主人池川の云ふには、其の宮歳は、小雪

と姉妹のやうに仲のよかつた藝妓である。

内證ながら、山田の御師、何某にひかされて、成程、現に師匠をして居る、が、それは、山田の廓、新道の、俗に螢小路と云ふ處に媚かしく、意氣である。

言語道斷、昨夜急に二見ヶ浦へ引越して來る筈はない！

扨て翌朝の事であつた。

電話で、新道の一茶屋へ、宮歳の消息を聞合せる
と、ぶら／＼病で寝て居たが、昨日急に、一變くへんが變つて世を去つた。――寫眞を抱いて居ましたよ、死際に薄化粧して 異さんによろしく 爾時、別荘の座敷の色は、二見ヶ浦の、海の蒼いよりも藍であつた。

簾に寄る白波は、雪の降るより尚ほ冷い。

其の朝、六藏も別荘の客の一人であつた。が、お
先ばしりで、衆と一所に、草の徑を、幻の跡を尋ね
た。――確に此處ぞ、と云ふ處に、常夏がはら／
＼咲いて、草の根の露に濡れつゝ、白檀の蒔繪の、
あはれに潮にすさんだ折櫛が――其の繪の螢が
幽に照つた。

松に舫つた釣舟は、主人の情で、別荘の庭に草を
植ゑ、薄、刈萱、女郎花、桔梗の露に燈籠を點して、
一つ、二見の名所である。

【完】